

同志社大学

2009年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010年 3月 5日提出

所属	職名	氏名
文学部	教授	服部 伸
研究題目	医療近代化過程におけるオルタナティブ医療選択者：日独比較に向けて	
研究成果の概要	<p>本研究の全体構想では、日独両国において、オルタナティブ医療の選択者が、どのような疾病に関心をもっていたのかを、時代ごとに比較することになっている。</p> <p>本年度、ドイツに関しては医療における科学化の進展が、オルタナティブ医療の患者の意識にどのような影響を与えたかを、家庭医学書の記述内容から明らかにした。</p> <p>日本に関しては、慶應義塾大学のグループによって作成された都道府県別死因別死者数統計データベース（友部謙一、鈴木晃仁http://www.rekishow.org/db/CSDS/）を活用して、日本における死因の変遷を確認したうえで、オルタナティブ医療としての漢方医療普及について考察した。日本の場合、1950年代まで感染症のリスクが高く、このことがオルタナティブ医療としての漢方医学の普及を遅らせていたと考えられる。</p> <p>論文公刊 「十九世紀末ドイツの家庭医学書の『科学化』：ルツツェ著『ホメオパシー教本』を中心に」、松塚俊三・八鍬友広（編）『識字と読書：リテラシーの比較社会史』、214-240頁、昭和堂、2009年。 「第二次世界大戦後の鍼灸分野における日欧の交流」、『文化学年報』59輯、2010年。</p> <p>口頭発表 「オルタナティブ医療における治療斜視各創出と民間人運動—正統派医師・非正統派医師・無資格治療師・患者にみる包摂と排除—」、第28回社会国家ワークショップ(2009年7月27日、同志社大学) “The German-Japanese Relations in the Sector of Acupuncture in the Post-War Era.” Workshop, “Japanese People and Culture: Views from a Transcultural Perspective. A Joint Project of Doshisha University and Eberhard Karls University Tübingen.”(2009年11月26日、テュービンゲン大学) 「日本の漢方医が見た戦後ドイツの医療と社会：非正統医療の国際交流から健康をめぐる日独比較医療史へ」、シンポジウム「日独近代社会における健康と身体—社会の科学化と大衆化の過程で—」(2010年1月30日、同志社大学)</p>	